茂木港外遺跡確認調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野上, 建紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1591

茂木港外遺跡確認調査報告

—1998年8月7日～9日 —

野 上 建 紀

1．はじめに

茂木港外遺跡は長崎市茂木港沖に位置する海底遺跡である。以前より「茶碗曽根」と称して沈船の伝承をもつ海域であり、昭和初期にすでに陶磁器が引揚げられている経緯をもつ。そして、1996年4月に海底作業中に多数の陶磁器が発見され、その翌月の潜水調査でも多数の陶磁器が海底に散乱していることが確認されている。

本稿は1998年8月に九州・沖縄水中考古学協会が実施した当海域における潜水調査に関する報告であるが、1996年に引揚げられている陶磁器資料に関する考察も加えておいた。

2．遺跡の環境と概要

（1）位置

茂木港は長崎市の中心市街の南東5kmに位置し、橘湾（千々石湾）に面する港である（図1）。南方には天草灘を挟んで天草諸島がある。茂木港は現在も天草あるいは熊本とフェリー等の運行によって結ばれているが、江戸時代においては天草をはじめ肥後・薩摩の諸港から長崎へ通ずる要港として繁栄した。長崎港の東側外港としての役割を有していたのである。

（2）発見当時の海底状況

1996年4月20～22日の遺跡発見時の新聞報道（毎日新聞4月23日付）を引用すれば、「水深15～20m付近の岩場周囲の泥を約20～30cm掘ると多数の陶器が出てきた。」とある。1996年5月19日の調査結果によれば、水深18m、潮流0not、視界2mで、底質は表層が柔らかいシルトになっているという。また、陶器等が多数確認された箇所は周囲より50～100cm程度えぐれた状態になっており、ここを境に岩礁？のようなものが10数mのびており、南西に3mほど離れた海底にも同じような岩礁がみられたという。

後日、この5月19日の調査の際の写真及び水中ビデオ映像を見る機会があった。陶器が多数散乱しているが、それは沈没時の状態を保っているものではなく、また付着物も少ないことから5月19日に近い時期に海底土中より掘り出されたもののように思えた。おそらくその前月の4月20～22日に遺跡が発見された際に掘り出されたものではないかと推測される。

（3）引揚げ陶磁器について

唐津系陶器を中心に約100点引揚げられている（図2）。資料の多くは遺跡発見者であるNTTが保管しているが、一部は長崎市教育委員会においても保管されており、同教育委員会によって実測図作成及び写真撮影が行われ、資料化されている。同教育委員会が資料を分類した内訳をみると、①唐津系銅緑釉皿（小）40点以上、②唐津系銅緑釉皿（中）4点、③唐津系銅緑釉碗4点、④唐津系灰釉皿（小）1点、⑤唐津系灰釉皿（中）12点、⑥唐津系飴釉碗1点、⑦唐津系擂鉢1点、⑧唐津系刷毛目片口鉢30点以上、⑨唐津系三島手大鉢3点以上、⑩染付瓶1点であり、合計96点以上を数える。生産年代は17世紀後半～18世紀前半を中心としたもので、唐津系陶器の生産地は佐賀県嬉野地区・武雄地区の陶器

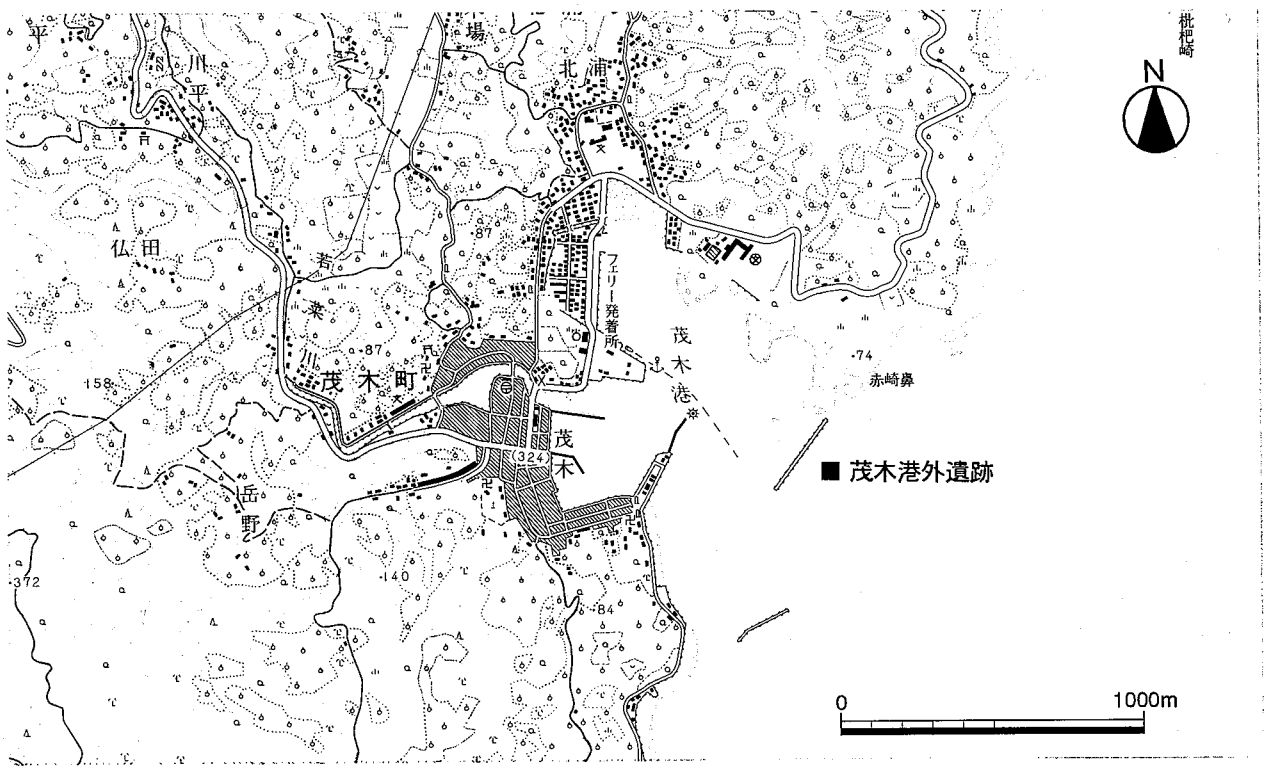

図１　茂木港外遺跡位置図

窯であろうと思われる。

まず、①～④の唐津系銅緑釉の碗・皿、灰釉皿（小）は佐賀県嬉野町内野山北窯跡出土品に類似している。内野山北窯跡は1988年に発掘調査が実施され、1996年に発掘報告書が刊行されている。報告書では物原の層序によって製品をⅠ～Ⅴ期に分けている。茂木港外遺跡で引揚げられている製品が該当するのはⅡ～Ⅲ期である。報告書ではⅡ期の年代を17世紀後半頃、Ⅲ期の年代を17世紀末～18世紀前半としている。①唐津系銅緑釉皿（小）は口径12.3cm、高さ3.3cm、高台径4.7cmで、内面に銅緑釉、外面に透明釉（灰釉）が施釉されており、高台部周辺は無釉である。また、見込みは蛇の目状に釉剥ぎされているが、砂目の付着は見られない。この種の銅緑釉皿は内野山北窯跡ではⅡ～Ⅲ期に見られる。②唐津系銅緑釉皿（中）は口径18.2cm、高さ4.5cm、高台径5.6cmで、内面に銅緑釉、外面に透明釉（灰釉）が施釉されており、高台部周辺は無釉である。見込みは蛇の目状に釉剥ぎされ、砂目の付着が４ヶ所に残る。いわゆる折縁状に口縁下で屈曲しており、器形は内野山北窯跡のⅡ期の製品に類似している。③唐津系銅緑釉碗は口径10.8cm、高さ6.3cm、高台径4.2cmで、外面に銅緑釉、内面に透明釉（灰釉）が施釉されており、高台部周辺は無釉である。この種の銅緑釉碗は内野山北窯跡ではⅡ～Ⅲ期に見られる。④唐津系灰釉皿（小）は口径13.1cm、高さ4.1cm、高台径4.4cmで、内外面に透明釉（灰釉）が施釉されており、高台部周辺は無釉である。口縁下で屈曲しており、見込みは蛇の目状に釉剥ぎされている。⑤唐津系灰釉皿（中）は口径19.4cm、高さ6.2cm、高台径6.2cmで、内外面に透明釉（灰釉）が施釉されており、高台部は無釉である。胎土・釉色等から内野山周辺の製品と推測され、器形そのものは同様のものが内野山北窯跡から出土している。⑥唐津系飴釉碗は推定口径12.0cm、高さ・高台径は不明である。内外面ともに飴釉が施釉されているが、高台部周辺は無釉のようである。内野山北窯跡に類例が見られる。⑦唐津系擂鉢は口径24.5cm、高さ9.3cm、底径8.9cmで、口縁部は玉縁状、底部は糸切り底となっている。肥前では17世紀後半の中で口縁部を玉縁状に作り糸切り放し底が主になるという。なお、生産地の特定はできない。⑧唐津系刷毛目片口鉢は口径21.0cm、高さ11.0cm、高台

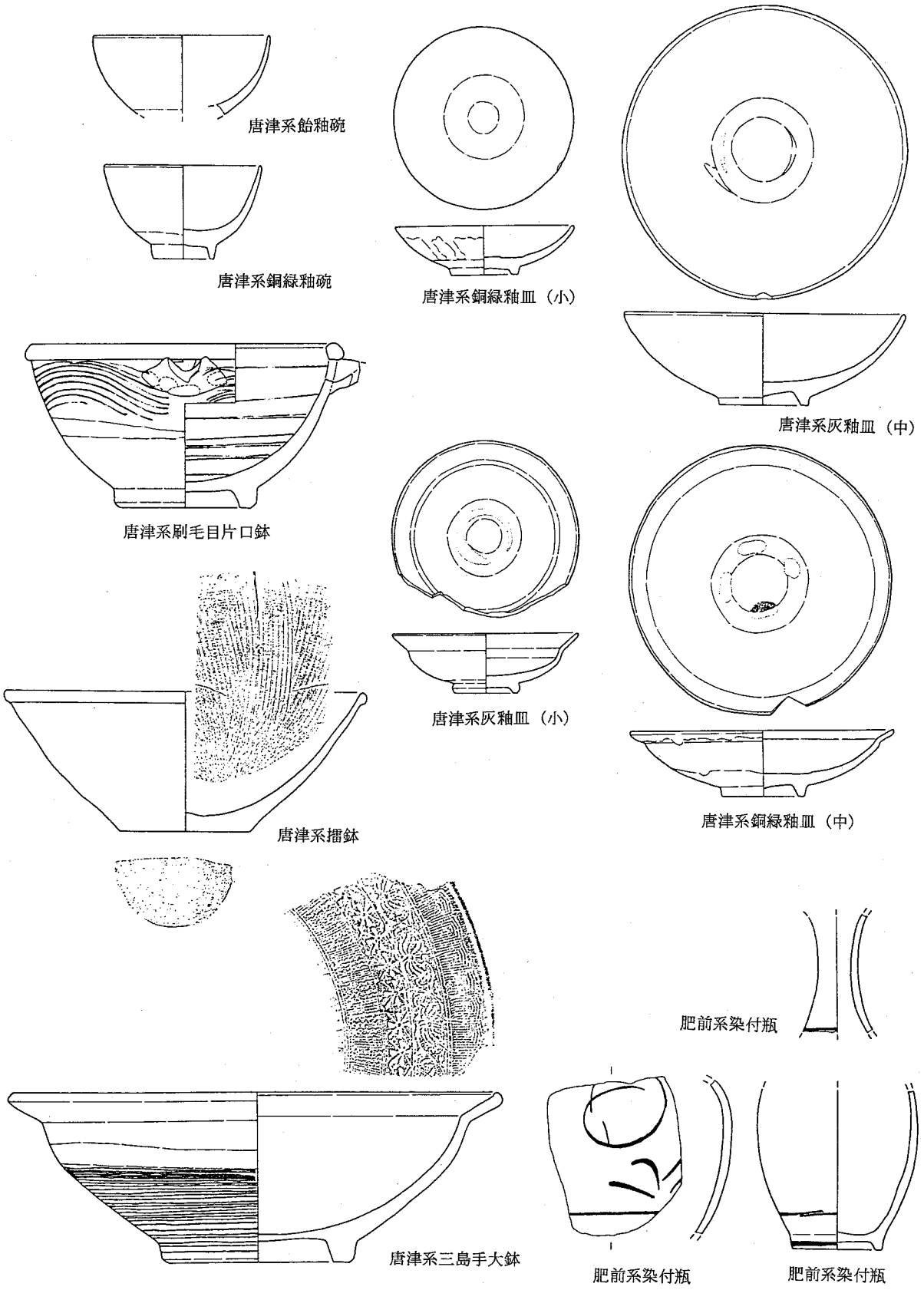

図２　1996年茂木港外遺跡引揚げ遺物（長崎市教育委員会保管）　S＝1／4

径9.0cmで、外面上部に波状の刷毛目が入り、内面にも薄く刷毛で白化粧が塗られている。胎土は赤褐色で、内野山北窯跡出土の刷毛目片口鉢の類とは異なるようである。武雄周辺の製品であろうと思われるが、生産地の特定はできない。なお、赤絵町遺跡では同様の形の刷毛目片口鉢がⅣ層段階より出土している。赤絵町遺跡のⅣ層段階は17世紀末～18世紀前半を中心とした年代が与えられている。⑨唐津系三島手大鉢は口径33.5cm、高さ11.4cm、高台径8.3cmで、内側面は象嵌が施されている。象嵌は印花を施した後に白化粧土を薄塗りしただけのようなものも含まれる。また、見込みには砂目痕が見られる。生産窯の特定は難しいが、樫ノ木山窯跡など武雄市の小田志周辺の窯場ではないかと推測している。⑩染付瓶は草花文を粗放に描いたもので、胎土・釉色などは嬉野町の吉田2号窯跡の出土製品に類似している。年代は17世紀後半頃ではないかと推測している。

以上、各製品の特徴を記したが、年代的には全て17世紀後半～18世紀前半の中に収まるものであるが、点数の少ない種類については、一括資料の中に含まれるかどうか検討しなければならないであろう。それは引揚げ品という性格上、当然のことと思われる。そして、これら引揚げ資料を観察する限り、内野山北窯跡のⅢ期に相当する17世紀末～18世紀前半に該当するものが多いと思われるが、Ⅱ期と共通する要素も見られることから、17世紀末～18世紀初を中心とした年代であろうと思う。

3．調査の目的と方法

調査の目的は、まず第一に遺跡の位置の特定、第二に目視調査による遺跡の状況の把握である。遺跡の位置の特定については1996年に遺跡を実際に潜水し、確認しているダイバーを同行させ、円形サーチで捜索し、特定を行う計画であった。今回、採用した円形サーチの方法は海底の任意の点にロープの一端を固定し、もう一方の末端を一人のダイバーが引っ張りながら、円を描くように周回し、もう一人のダイバーがそのロープ上を往復しながら捜索する方法である。

そして、遺跡発見後に陸上からトランシットで視準して地図上に位置をおとし、海底に基準杭と基準ラインを設置して目視調査を行う計画であった。目視調査は、船体の有無、遺物の散布状況を確認し、今後の本格的な調査方針の検討材料とするためのものであり、その記録については水中カメラ及び水中ビデオを用意した。

4．調査の内容

（1）調査組織

調査主体：九州・沖縄水中考古学協会

調査担当者：野上建紀

調査員：林田憲三、石原渉、高野晋司、小川光彦、西健一郎、池田榮史

調査指導者：佐々木達夫

調査協力者：山元房吉、扇浦正義、荒木伸也、尾上博一

調査支援者：小野田康久、里弘臣、三浦清文、名切勝也、調査取材班：木村史ほか

（2）調査日誌

1998年8月7日　晴

7：50波佐見発（佐々木・野上）、9：30茂木着。国富株式会社の小野田・三浦・里と合流。10：30～50茂木バス停着、10：50漁協に挨拶、11：50林田・小川と合流。

12：45漁協長を乗せて茂木港出港、調査船兼警戒船は「恵美丸」、船長は名切勝也。12：50漁協長の指示する箇所にブイ投入、12：55漁協長を茂木港まで送る。

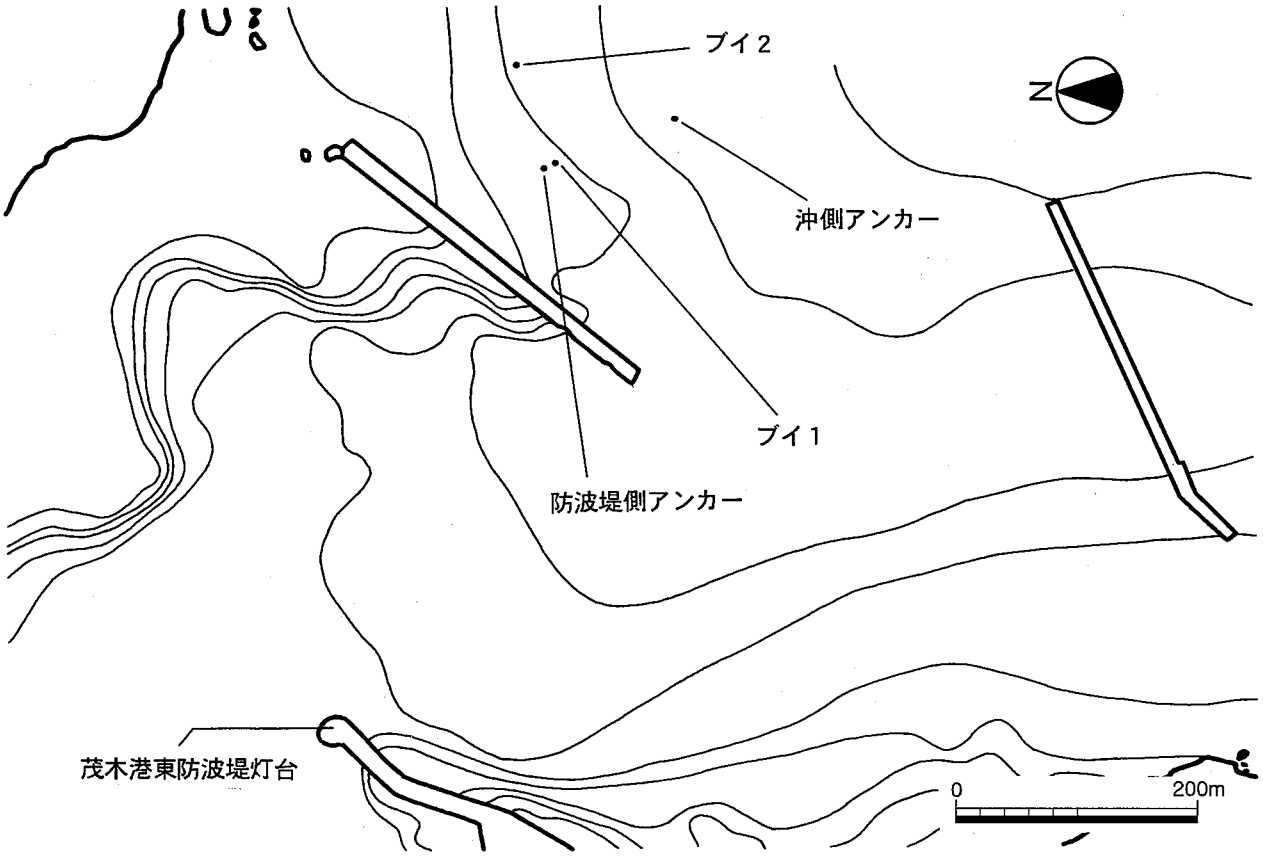

図3　1998年茂木港外遺跡調査位置図

お神酒を捧げた後、13：10 1回目の円形サーチを開始（三浦・里）。波高0.5 m。

海底は瀬となっており、2年前の海底状況とは異なっている。水深17.2～18.0 m、視界2～3 m。遺物の発見箇所に小ブイをあげる。13：40ブイの移動。

13：46～13：55、14：02～14：15小ブイ及びブイの周囲を調査、14：35改めてブイを投入（ブイ1とする）、14：46～15：25円形サーチ（三浦・里）、陶器の鉢を発見する。15：47～16：07潜水調査（小野田）、水深18 m。16：20～39潜水調査（林田）、16：57～17：13潜水調査（野上・小川）水深17.9 m。発見された陶器鉢が唐津系陶器鉢（17世紀後半～18世紀前半）のものと野上が確認する。

17：15調査海域離脱、17：20茂木港着、漁協に挨拶した後、今日の宿舎である長崎シティホテルに向かう。18：30ホテル着、高野・扇浦・荒木・尾上と合流。夜、石原・西・池田と合流。

調査初日で遺跡の位置を特定する計画であったが、2年前とは海底の状況が変化していると思われ、遺跡の位置が特定できなかった。しかし、茂木港外遺跡のものと思われる遺物は確認できたため、明日は遺物が確認された箇所の周囲を中心に捜索することにする。

1998年8月8日　くもりのち晴

昨日、陶器鉢が発見された箇所を中心に円形サーチを行うことにする。

6：50起床・朝食、7：45ホテル発、8：15茂木着、8：28茂木港着、8：30調査海域着。ブイ1が移動していたため、元に戻す。ブイ1の箇所を中心に円形サーチを行う。8：57～9：21円形サーチ（石原・小野田）、陶器・瓦等を7点程度発見、水深19 m。9：42～10：07ブイの北側を円形サーチ（小川・三浦）、染付唐草文水注、白磁碗を発見する。10：15～10：45円形サーチ（林田・里）、瀬と瀬の間及び沖の方を調査、水深19 m。11：00～11：18円形サーチ（野上・小野田）、北側の岸に近い側を調査、水深18 m。高さ3 m以上の岩礁あり。11：35調査海域離脱、茂木公民館にて昼食及び休憩する。

当初、数回の円形サーチで確認できるであろうという見通しが暗いものになってきた。ブイ１周辺に遺跡があろうと推測できるが、確証がない。シルトに再び埋まっている可能性が高い。そこでとりあえず今回の調査で確認された遺物の写真記録をとることにした。そして、遺跡の位置を地図上に割り出すために陸上班を編成し、準備していたが、遺跡の位置が特定できない現状ではそれもできない。しかし、今後のことも考えてブイ１だけでも位置の割り出しを行うことをお願いした。

13：25公民館発、茂木港にてテレビ長崎の取材班（慎栄丸）と合流。13：46調査海域の西側防波堤に陸上班（高野・西・荒木・尾上）をおろす。ブイ１をGPSで計測（北緯32.42.009、東経129.55.381）、14：05ブイ１周辺の発見遺物３点の写真撮影（石原・小野田）。14：38ブイ２の円形サーチ（小川・三浦）、瓶の首部、白磁香炉？、染付碗を発見。ブイ２はブイ１の北東側に位置し、GPSによる計測値は北緯32.42.044、東経129.55.420である。一方、潮止りの時刻（14：25）を狙って防波堤よりブイ１の位置を測量する準備に入る。14：40防波堤上の２台のトランシットでブイ１を視準する。15：37ブイ３付近を円形サーチ（若杉・里）、ブイ３はブイ１の南西側に位置する。GPSで計測しようと試みたが、船のアンカーにからんでしまい、移動してしまった。16：19～16：26ブイ２付近の遺物の確認を行う（野上・林田）。瓶の首部は胎土が灰色、貫入が入っている。江戸中期のものと思われる。白磁香炉は内面が蛇の目釉剥ぎされており、釉剥ぎされた部分にはアルミナが塗布してある。19世紀の製品であろう。染付碗については近代の製品であった。陸上班を船に乗せて、茂木港に帰港。

調査２日目を終えてなお位置を特定できないことについて二つの理由を考えた。位置が異なるか、海底状況が変化しているか、である。今後の調査方法に関わることであるため、このどちらかの理由に特定させる必要がある。まず、水深の問題を考えてみる。1996年４月の発見時の水深が15～20ｍ、1996年５月の調査時が18ｍ、今回の調査では概ね18ｍである。干満差があるため、一概に比較はできないが、大きな違いはない。また、漁協長と1996年５月の調査時のダイバーの遺跡の位置に関する証言は一致しており、位置が異なっている可能性は低いと思う。次に海底状況の変化について考えてみる。この場合、二通り考えられる。一つは遺跡の面が全て流されてしまっている可能性、もう一つはシルトで覆われている可能性である。1996年調査時のダイバーは周囲に岩礁はなかったというが、今回の調査では岩礁は広い範囲で確認されている。海底に堆積する泥が流されて、岩礁が露出したのか。しかし、中には3ｍ以上の高さをもつ岩礁もあり、これらの岩礁全てが露出したとなると、水深に変化が起きるはずである。1996年５月の映像と比較する限りにおいては、今回の方が視界は良好である。岩礁の有無も確認しやすいように思う。人の記憶によるものであるため、確認することは難しいが、1996年５月においては視界不良のため、岩礁が確認できなかった可能性がある。ここで1996年４月と５月の潜水時の状況をもう一度考えてみる。1996年４月の記述には「岩場周囲の泥を約20～30cm掘ると多数の陶磁器が出てきた。」とある。1996年５月の記述には「陶器等が多数確認された箇所は周囲より50～100cm程度えぐれた状態になっており、」とあり、「半径10ｍ以内を捜索したが、他は何も見られなかった。」と続く。こうした状況と現在の海底状況を総合的に判断すれば、遺跡は今回我々が目にしている海底のシルトの下に本来あったものであり、1996年４月にエアーリフトによって泥を除去した結果、出土した。そして、その翌月である５月の時点ではまだ掘り上げたままの状態が残っていたが、２年経った今回の調査時には再びシルトで覆われている可能性が高い。1996年５月の調査時においても50～100cm程度えぐれた状態の箇所を除けば、他は何も見られなかったのである。すなわち、シルトを除去しなければ、遺跡は表面には現れないということである。こうした可能性は私自身、今回の調査前から持っていたし、1996年５月の調査時のダイバーにその可能性を聞いたこともあった。しかし、その一方で何らかの痕跡は残しているであろうという見通しもあった。今回、いくつか確認されている遺物が

そうしたものなのであろう。

1998年8月9日　くもりのち晴

円形サーチによる探索方法の限界を感じる。おそらくこのままの方法で続けても遺跡の確認は難しいであろう。今日の調査は今後の調査に有効なデータの収集につとめようと思う。まず、遺物が確認された位置の海底状況をビデオ撮影し、今後の調査区設定のための資料として、遺跡推定範囲の沖側と防波堤側の海底状況を調査を行い、今回の調査を終了させることに決定する。

7：00起床、7：50長崎シティホテル発、8：15茂木着。8：35茂木港出港、調査海域着。

8：55～9：30ブイ1周辺にガイドロープ設置（小野田・三浦）。次回の調査の際にすぐに確認できるようにするためである。9：44～10：25水中ビデオによる撮影（野上・里）。野上は遺物の確認を同時に行うことにする。まず、唐津系陶器鉢2点、いずれも17世紀後半～18世紀前半のものである。18世紀の肥前系染付水注（把手部）、壺あるいは甕の口縁部破片（江戸期）、瓦（近現代）など。染付碗も数点見られたが、いずれも転写によるもので近現代のものであろう。

今後の調査のための資料として、ブイ1の沖側及び防波堤側の2ヶ所の潜水調査を行う。沖側は水深20.2～21.9m、防波堤側は水深14mである。今後、調査区を設定するとすればこの間であろう。潮の干満差を最大限見積って考慮してもこの両点の付近までであろうと思う。10:45～11:08沖側アンカー点（北緯32.41.972、東経129.55.434）の潜水調査（小川・三浦）。海底状況は岩礁が一部にあり、周囲はシルトである。近代の染付小坏を発見する。この地点まで岩礁の広がりがあることを確認できた。

11：02原爆投下時刻。茂木港にもサイレンが響き渡る。1分間の黙祷を各自が行う。11：25～11：55防波堤側アンカー点（北緯32.42.006、東経129.53.379）の潜水調査及び写真撮影（小野田・若杉）。海底状況は砂地とこぼれ瀬、岩礁が大きく、シルトも広がっている。陶器片と白磁碗を発見する。12：08海面のブイを回収し、ブイ1の海底部のガイドロープに小ブイを括り付ける。

調査海域を離脱し、漁協に寄ってから、12：50茂木発。長崎市内の銀嶺で昼食をとる。長崎県文化課の立山分室に行き、茂木港外遺跡の引揚げ品を観察する。15：30立山分室発、17：00波佐見着。

（3）潜水記録

調査日程3日間に延べ20回の潜水調査を行った（表1）。潜水調査を行った者は野上・林田・石原・小川・小野田・里・三浦の7名である。これら潜水調査者の他にテレビ長崎の取材班の木村、その支援者の若杉らが加わった。潜水計画は野上・林田・石原・小川はPADI RECREATIONAL DIVE PLANNERによったが、野上と小川はDIVE PLANNERに加えてダイブコンピューターを併用した。その結果、野上・林田・石原・小川については全ての潜水調査を無減圧潜水で行った。一方、小野田・里・三浦は業務用のDIVE PLANNERを使用したため、自己管理に任せておいた。

（4）測量記録

調査点の測量については、調査船に備え付けられているGPSによる緯度・経度の計測、陸上（防波堤）からの計測の二通りの方法を行った。GPSによる計測は調査点上のブイに船を横付けし、船長が読み上げる数値を野上が記録した。陸上からの視準は高野・荒木・尾上により防波堤上に設置された二つの基点から2台のトランシットを使って同時にブイを視準する方法を用いた。

その結果、GPSによる計測は8月8日にブイ1・ブイ2、8月9日に沖側アンカー点・防波堤側アンカー点の4点を計測することができたが、実際の海上では数10mは離れていたと認識されたブイ1と防波堤側アンカー点が数値上ではわずか数mの距離となってしまった。GPSの誤差によるものか、潮によってブイが流されたものか、あるいは両方であるのか不明であるが、信頼性に欠ける。8月7日・8日の両日は大潮で、海底面において舞い上がるシルトを流してくれるため目視調査を行うには好条件と

No.	月日	IN	OUT	潜水時間	潜水者名	調査地	作業内容	備　考
1	8.7	13：00	—	—	三浦・里	漁協長指示ポイント	円形サーチ	
2		13：46	13：55	0：09	小野田	漁協長指示ポイント	円形サーチ	
3		14：02	14：15	0：13	小野田	漁協長指示ポイント	円形サーチ	唐津系陶器鉢
4		14：46	15：25	0：39	三浦・里	ブイ１周辺	円形サーチ	
5		15：47	16：07	0：20	小野田	ブイ１の南西側	円形サーチ	
6		16：20	16：39	0：19	林田	ブイ１の南西側	円形サーチ	
7		16：57	17：13	0：16	野上・小川	ブイ１周辺	遺物確認	唐津系陶器鉢
8	8.8	8：57	9：21	0：23	石原・小野田	ブイ１周辺	円形サーチ	陶器鉢、甕等計７点
9		9：42	10：07	0：25	小川・三浦	ブイ１周辺	円形サーチ	染付水注、白磁製品
10		10：15	10：45	0：30	林田・里	ブイ１周辺	円形サーチ	
11		11：00	11：18	0：18	野上・小野田	ブイ１の北東側	円形サーチ	
12		14：05	—	—	石原・小野田	ブイ１周辺	写真撮影	唐津系陶器鉢他計３点
13		14：38	—	—	小川・三浦	ブイ２周辺	円形サーチ	瓶、香炉
14		15：37	—	—	里・若杉	ブイ３周辺	円形サーチ	
15		16：19	16：26	0：07	野上・林田	ブイ２周辺	遺物確認	瓶、白磁香炉？
16	8.9	8：55	9：30	0：35	小野田・三浦	ブイ１周辺	ガイドロープ設置	
17		9：44	10：25	0：32	野上・里	ブイ１周辺	ビデオ撮影	唐津系陶器鉢
18		10：45	11：08	0：23	小川・三浦	沖側アンカー	円形サーチ	染付小坏
19		11：25	11：55	0：30	小野田・若杉	防波堤アンカー	円形サーチ、写真撮影	陶器、白磁製品
20		12：08	—	—	里	ブイ１周辺	ブイの回収、設置	

表１　1998年茂木港外遺跡潜水調査記録

なったが、測量を行うには条件が悪かったように思う。また、８月７日・８日は満潮時刻を作業開始前に迎えるため、潮の流れの影響を受けない潮止りの時刻に測量作業を行うとすれば午後の干潮時にせざるをえなかった。ブイに付けられたロープの長さは満潮時の水位に合わせたものであったため、干潮時にはロープがたるんだ状態となっていた。実際にブイ２に潜水調査した際にはブイから調査点に辿り着くまでほぼ斜めに潜降していった。海底面の調査点と海面のブイの位置が大きく異なっていたのである。計測時の水深に合わせてブイのロープの長さを調整し直す必要があったように思う。

一方、陸上からの計測数値そのものは信頼性の高いものである。潮止りの時刻より15分遅れの計測であったが、潮の流れはなかった。それでもやはり干潮時であったため、ロープがたるんであり、海底の調査点の直上にブイがあったとは言い難い。しかし、GPSによる計測に比較すればかなり信頼が置けるものと考えている。

（５）発見された遺物

今回の潜水調査で確認できた遺物は約17～20点である（表２）。今回は基本的に遺物の取り上げは行わずに、写真撮影とビデオ撮影にとどめておいた。資料数に幅があるのは、潜水調査者が遺物の存在を確認しても視界不良のため再確認することが難しく、重複している可能性があるからである。

遺物の年代は最も古いもので17世紀後半～18世紀前半の陶磁器であり、新しいものでは近現代の製品が含まれる。17世紀後半～18世紀前半の遺物についてはこの海域で沈没した船の積荷、あるいは投棄された積荷に伴うものである可能性が高く、その確認地点はブイ１周辺に集中している。唐津系陶器鉢など1996年に大量に引揚げられている陶磁器と同様のものも確認されているが、銅緑釉のかかった碗・皿の類は今回は発見されていない。また、染付水注など1996年の引揚げ資料には見られない製品も確認できた。生産年代は1996年に引揚げた陶磁器の年代と比較的近いと思われるものの、同じ積荷に含まれていたものなのか、明らかではない。

位置	GPS計測値	遺物名	残存部	年　代	備　考	記録内容
ブイ１付近	32.42.009	唐津系陶器鉢	底部～口縁部	17c後半～18c前半		ビデオ・写真撮影
	129.55.381	唐津系陶器鉢	底部～口縁部	17c後半～18c前半		ビデオ撮影
		唐津系陶器壷？	口縁部のみ露出	江戸期？		
		瓦	全体	近現代？		
		唐津系陶器？		江戸期？	数点？	
		染付碗	体部～口縁部	近現代	転写	ビデオ撮影
		染付碗	体部～口縁部	近現代	転写	
		肥前系染付水注	把手部	18世紀？	花唐草文	ビデオ撮影
		唐津系陶器甕	口縁部	江戸期？		ビデオ撮影
		磁器片	把手部	近現代		ビデオ撮影
ブイ２付近	32.42.044	肥前系瓶	首部～口縁部	17c後半～18c	胎土灰色	
	129.55.420	白磁香炉？		19c	蛇の目釉剥ぎ・アルミナ塗り	
		染付碗		近現代		
		染付碗		近現代		
沖側アンカー	32.41.972	染付小坏	？	？		
	129.55.434					
防波堤側アンカー	32.42.006	陶器片		？		写真撮影
	129.55.379	白磁碗	底部～口縁部	近現代		写真撮影

表２　1998年茂木港外遺跡確認遺物一覧表

（６）確認された海底状況

まず、概況から言えば海底面はシルトに覆われており、岩礁が点在している。そして、南東方向に緩やかに傾斜している。岩礁が多いのは赤崎鼻に近い側と防波堤に近い側である。それは赤崎鼻から防波堤の方向に岩礁が主にのびているためである。

今回の調査で最も遺跡が存在する可能性が高いブイ１の調査点はシルトに覆われ、岩礁が点在している。岩礁の多くは高さ50cm以下であるが、50cm以上のものも少ないが見られる。そして、最も赤崎鼻に近いブイ２の調査点も同様にシルトと岩礁からなるが、岩礁は大きく、またその数も多い。岩礁の中には３ｍ以上の高さをもつものもある。そして、最も防波堤に近い防波堤側アンカーの調査点は、砂地とこぼれ瀬、シルトと岩礁からなり、岩礁はやはり大きい。最も沖側の沖側アンカーの調査点においてはシルトに覆われているが、岩礁も一部見られている。岩礁はかなり広範囲に広がっているようである。シルトは厚さ30～50cmとみられ、表層１～2cm程度はきわめて柔らかく粒子が細かい。そのため、わずかな水の動きであってもシルトが舞い上がり視界不良となる。今回の調査は大潮（9日は中潮）であったために潮の流れが速く、舞い上がったシルトも流されたため、視界の回復も早かった。

そして、海底状況の変化の確認を行うために、今回ブイ１の調査点周辺にガイドロープを設置し、同じ箇所を再調査できるようにしておいた。ブイ１の調査点周辺は写真撮影やビデオ撮影も行っているので、次回の潜水調査の際にどの程度変化したか確認することが可能と思われる。

５．まとめ

（１）1998年確認調査に関する総括

今回は、2年前に潜水し、遺跡を確認したダイバーも同行しており、その証言内容からおそらく数回の円形サーチにより発見できるであろうという見通しで調査を行った。しかし、実際はこの2年間に海底状況が変化したことを確認したのみで、遺跡の発見には至らなかった。

1996年5月19日に確認された際の水中ビデオの映像を見ると、多数の陶磁器が散乱している。今回はこうした状況は確認されなかったが、海底状況の変化によって遺跡が消滅してしまったわけではないであろう。そして、今回の状態がとりわけ発見しにくい状態であったわけではなく、むしろ1996年5月に確認された時が特殊な状態であったと思われる。すなわち、その前月に発見された際に泥が掘られ、陶磁器が引揚げられた直後であったために、多数の陶磁器が散乱したままの状態で確認されたものと思う。海底状況が変化したと前記したが、正確に言えばこの2年間に再び泥に覆われ、旧状に復した可能性が高いように思う。

このことは目視調査の限界を示すとともに、目視調査が成果を上げるに適した時期を示している。茂木港外遺跡の例で言えば、1996年4月発見時の直後に目視調査を行えばそれなりの成果が上がったであろうということである。茂木港外遺跡の場合、1ヶ月程度は陶磁器が散乱している状態が続いていたが、これはその海域の条件やその間の気象によっても異なるであろう。また、玄界灘に面する岡垣浜では大量の陶磁器が採集されているが、海が荒れた後にはよく陶磁器が打ち上げられているという。海が荒れたことにより海底下にあった、あるいは海底に定着していた陶磁器が表面に現れる可能性もあるであろう。茂木港外遺跡の場合は、人為的に海底下に「特殊な状態」を作り出したが、嵐などの自然状況が特殊な状態を作り出すことも考えられるのである。要はそれが人為的なものであれ、自然の要因によるものであれ、特殊な状態が持続している間に目視調査を行えば、成果が上がりうるということである。特に木造船の場合、海底下に埋もれていなければ遺存しにくい。逆を言えば、埋もれていればいるほど遺存状態はよい。そうした遺跡を目視調査して成果を上げるためには、「特殊な状態」において行う必要があるのである。陸上の調査と異なり、特殊な状態が持続している間に資金を調達し、調査組織を固め、海上保安庁などへの申請を行うことは現実的には難しいかもしれないが、位置の特定のみを目的とした調査であれば、ある程度可能であると思われる。位置さえ正確に特定されていれば、次の段階としてエアーリフト等を使用して、改めて特殊な状態を作り出せるし、本格的な調査も可能になるのである。前述したように今回の調査は円形サーチにより発見することを前提に、調査計画を立てたものであり、発見することを目的としたものでなければ、それに適した方法でもなかった。海底状況の変化を考えれば、遺跡の位置を特定する段階から円形サーチというアナログ的な単純な方法でなく、考古学的手法を用いるべきであったと考えている。

そして、今回の調査の成果としては、具体的な遺跡の位置や範囲は明らかにできなかったものの、遺物の発見によっておおよその位置がわかったことである。遺跡はおそらくブイ1の調査点周辺からそれほど離れていない位置にあると思われる。今後もこの海域について調査を継続させるつもりでいるが、何らかの手段で海底のシルトを除去する方法を加えなければならないと考えている。

（2）茂木港外遺跡の意義と課題

茂木港外遺跡から引揚げられている資料から陶磁器の生産と流通について考察し、茂木港外遺跡の意義と課題を述べてみたい。

茂木港外遺跡引揚げ資料の生産地は、佐賀県藤津郡嬉野町、武雄市南部などの窯場であると推定される。内野山北・西窯などの内野山、吉田2号窯などの吉田山、樫木山窯などの小田志山の窯場である。内野山と吉田山は同じ嬉野町にあり、その水平距離は約5kmである。また、小田志山は武雄市にあるが、嬉野町の内野山と武雄市の小田志山は市町境を挟んで隣接しており、その両者の窯場の距離はわずか2kmほどしかない。そして、これらはいずれも塩田川の支流（下宿川、吉田川、小田志川）沿に位置する窯場である。すなわち、茂木港外遺跡引揚げ資料の生産地こ推定される窯場はかなり狭い範囲に限って分布しており、かつ地理的には緊密な関係にある。一方、それらの窯場は政治的には、内野山は

鍋島本藩領、吉田山は蓮池藩領、小田志山は武雄鍋島領に属し、それぞれ管轄が異なっている。このことは茂木港外遺跡引揚げ資料について各々の藩がそれぞれに積出したというよりは、この地域の陶磁器を扱う商人等が集荷して積出したことを推測させる。

一般に有田磁器などは伊万里津まで陸路で運ばれ、伊万里津から積出され、全国に流通したと推測されている。少なくとも幕末には「旅陶器」として、平戸領木原、同領三河内、同江永、大村領破佐見、唐津領椎ノ峯などの他藩の陶磁器も伊万里津に集荷され、積出されている。もちろん、杵島郡や藤津郡の窯場も例外ではなく、伊万里商人とそれらの窯場との関わりを示す資料も存在する（前山1990）。そのため、茂木港外遺跡引揚げ資料に有田周辺の磁器製品が多数含まれていれば、嬉野・武雄南部地区から伊万里津に運ばれ、伊万里津から茂木港へ運ばれたと考えるのが最も妥当であるように考えるのであるが、前述したように茂木港外遺跡引揚げ資料はその生産地が嬉野・武雄南部地区に限られている可能性が高く、その場合、必ずしも伊万里津を経由したと考えなくてもよい。あるいは伊万里津に至る途上とも考えられる。そして、伊万里津以外の港から積出された例は文献資料から知ることができる。例えば吉田山のある蓮池藩においては領内唯一の河川港である塩田港の商人が吉田皿山の焼物商売にあたっており、享保年間には塩田商人の協力があって、船５艘に焼物を積んで大坂へ送り出した記録がみられる（前山1990）。この場合、有明海の潮汐を利用して塩田港から有明海に出たものであろう。伊万里津を経由する必然性はない。また、元禄５年（1692）には「志久津エ、紀伊国より、家具為売買、旅船参着、云々」とあるように、六角川中流域の河川港である志久津に紀州商人の船が訪れている。その他、同年には播州網干の米積船や播州赤穂の米積船が入津している。志久津から陶磁器が帰荷として、積出されたかどうかはわからないが、河川を利用した盛んな水上交通は理解できる。それでは茂木港外遺跡引揚げ資料の最初の積出し港はどこであったのであろうか。嬉野・武雄南部から最も近い港は塩田港と彼杵港である。塩田港は前述のとおり、塩田川中流域の河川港である。生産地と推定される窯場はいずれも塩田川の支流沿いに位置していることから塩田港で集荷されたと考えることは妥当性がある。一方、彼杵港は大村湾に面する港で、嬉野からは長崎街道を経由して至る。今のところ、このいずれかの港である可能性が高いと思われるが、その積出し港によって茂木に至るまでの経路は大きく異なってくる。まず、塩田港である場合は有明海に出て島原半島を回り込んで茂木に至る経路となる。そして、彼杵港である場合は海路で直接茂木に至った可能性も考えられるが、大村湾を時津まで渡り、時津街道・茂木街道を経て茂木に至る経路が最も妥当であろう。ここで問題となるのが茂木港外遺跡引揚げ資料の沈没過程である。すなわち、茂木港に入港しようとした際に沈没したのか、あるいは出港しようとした際に沈没したのか、である。船あるいは積荷の投棄という事態は海況の悪化が主な要因であることを考えると、そのような海況の際にあえて出港することは考えにくいが、港に繋留中に沖に流されて沈没した可能性も残されている。その場合、入港しようとした際であれば海路を用いた塩田港からの経路の可能性が高くなる。この可能性には茂木港に入港する予定ではなく、時化に遭遇したために緊急避難的に茂木港に入港しようとした際に暗礁に座礁し沈没した可能性も含まれる。

以上のことから嬉野・武雄南部地区から茂木に至るまでの考えられる経路を伊万里津を経由する場合を含めて、以下にまとめてみることにする。

（１）嬉野・武雄南部地区－伊万里津～（西彼杵半島西岸沖）～茂木

（２）嬉野・武雄南部地区－（長崎街道）－彼杵港～（大村湾・西彼杵半島西岸沖）～茂木

（３）嬉野・武雄南部地区－（長崎街道）－彼杵港～（大村湾）～時津
　　－（時津・茂木街道）－茂木

（４）嬉野・武雄南部地区－塩田港（その他、六角川・塩田川の河川港）～（有明海）～茂木

経路の細部はさらにいくつか考えられるが、基本的なルートとしてはこうしたものであろう。そして、引揚げられた陶磁器資料の組成が、船の積荷の組成を比較的正確に反映している場合、すなわち、嬉野・武雄南部地区に生産地が限定される場合、（2）～（4）のルートが妥当と推測されるのである。さらに海難状況を考えた場合、断定することはできないが（4）の可能性が高いということになる。

次にこれらの陶磁器の目的地の茂木港の役割を考えてみる。これらを積載していた船が、本来、茂木港を目的としていなかった場合、すなわち緊急避難的に茂木港を利用しようとしていた場合は、おそらく船は長崎半島を回り込んで北上して全国の市場へ向う予定であった可能性が高い。茂木港を目的としていた場合、3通り考えられる。一つは茂木港最終目的港として陸路で長崎周辺の市場に向う予定であった可能性、一つは茂木港を目的としていなかった場合と同様に長崎半島を回り込んで北上して全国の市場へ向う予定であった可能性、もう一つは茂木港が天草をはじめ肥後・薩摩の諸港と長崎を結ぶ要港として繁栄した港であったことから、こうした地方向けに向う予定であった可能性である。

まず、長崎周辺の市場へ向う場合は、言うまでもなく嬉野・武雄南部地区の陶磁器の荷揚げ港としての役割を担っていたことになる。次に長崎半島を回り込んで北上する場合を考えてみる。茂木港外遺跡出土資料の中で少なくとも嬉野の内野山窯などで生産された銅緑釉碗・皿の類は北は北海道、南は沖縄に至るまで広く全国の消費遺跡において出土が見られるものである。こうした銅緑釉碗・皿の類が専ら茂木港から直接消費地へ向けて積み出されたとは考えにくい。伊万里湾の鷹島海底遺跡においても出土が見られることから、やはり全国流通させる場合は伊万里津を経由したであろうと思われるのである。この場合、茂木港は生産地から伊万里港へ向う中継港の役割を担っていたことになる。

最後に天草をはじめ肥後・薩摩地方に向う場合を考えてみる。茂木港は有田周辺の陶磁器を積み出した伊万里津、波佐見周辺の陶磁器を積み出した川棚港、あるいは塩田周辺の陶磁器を積み出した塩田港などと異なり、生産地に直接結びついた港ではない。そして、茂木は江戸初期においては島原領であったが、寛永18年（1641）に天草が幕府領となると、天草を結ぶ茂木の役割は重要なものとなり、寛文8年（1668）には茂木も幕府領とされている。そして、明和5年に茂木が長崎代官支配、幕末期に天草が長崎代官支配となると、茂木の役割は一層重要なものとなったという。天草との関わりについてさらに記せば、17世紀後半には天草地方においても磁器が生産されており、その中には染付見込み荒磯文碗・鉢のように東南アジアなど南方向けの製品が含まれている。東南アジア向けであれば、最終的な積出し港は長崎であろう。よって、天草地方における磁器製品の一部は長崎港の東側外港である茂木港に荷揚げされていた可能性が高い。また、江戸後期においては長崎周辺においても亀山窯や瀬古窯などで磁器生産が行われている。その原料である陶土は天草土を用いたという（高田1998）。そうした天草土（天草陶石）も長崎周辺の窯場に運ばれる際には茂木港に荷揚げされた可能性が考えられる。陶磁器の生産と流通に限っても茂木と天草の関わりは深いものであったと推測される。また、肥後・薩摩地方についても興味深い記録もいくつか見られる。天保6年（1835）の『伊万里津積出陶器荷高国分』（前山1990）を見ると、伊万里津から肥後・薩摩などへは積出されていない。また、文久3年（1863）の資料に見られる伊万里津の遠国船頭の内訳をみると、九州内では筑前・豊前・豊後・日向・対州・壱州・唐津・伊万里などの遠国船頭は見られるものの、やはり肥後・薩摩の遠国船頭は見られない。史料の年代と茂木港外遺跡引揚げ資料の推定年代との間には大きな隔たりがあるが、旅商人が盛んに伊万里津に入津していた幕末期においても肥後・薩摩地方の遠国船頭の記載が見られないことは興味深い。肥後・薩摩地方向けの陶磁器に関しては伊万里津以外の二次的な積み出し港の存在の可能性を示唆している。つまり、茂木港は単なる中継港というよりはむしろ肥後・薩摩地方に向けた二次的な積み出し港であった可能性も考えられるのである。

このように茂木港外遺跡引揚げ資料は当時の陶磁器の流通について多くの考えを示唆してくれている。しかし、これは引揚げられた陶磁器資料の組成が、船の積荷の組成を比較的正確に反映していることを前提としている。反映しているかどうかは、やはり船体の有無が重要な問題となる。俵詰する場所にもよるが、比較的近い窯場の製品が同じ俵に詰められることはむしろ自然である。そのため、単なる積荷の投棄である場合、引揚げられる陶磁器の生産地の分布は狭い範囲に限られると予想されるが、それが船全体の陶磁器の積荷の傾向を表すかどうかはわからない。投棄されなかった積荷は全く異なる組成をもっているかもしれないのである。そのため、陶磁器の流通について積荷の組合せの問題を論じる場合、船が積荷とともに一括して沈没したかどうかを確認することが重要であるように思われるのである。

なお、この調査は財団法人日本科学協会による1998年度笹川科学研究助成を受けて実施した。そして、今回の調査においては多くの方々の御協力と御支援を頂いた。とりわけ研究指導者の佐々木達夫先生、研究協力者の林田憲三氏、石原渉氏、高野晋司氏、小川光彦氏らをはじめとした九州・沖縄水中考古学協会の会員諸氏には大変お世話になった。また、茂木漁業協同組合の山元房吉組合長をはじめとした地元関係者、長崎県教育庁、長崎市教育委員会、国富株式会社長崎営業所、株式会社テレビ長崎の方々にも全面的な御協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

高田美由紀　1998 『亀山焼窯跡』長崎市埋蔵文化財調査協議会
野上建紀　1998 「茂木港外遺跡に関するノート」『研究紀要』第7号有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館
1998 「1998年茂木港外遺跡確認調査計画書」九州・沖縄水中考古学協会
1998 「茂木港外遺跡確認調査実施計画書」九州・沖縄水中考古学協会
1999 「肥前陶磁の流通形態」『貿易陶磁研究 No.19』日本貿易陶磁研究会
原田保則　1992 『武雄市内古窯跡分布調査報告書－武雄市文化財調査報告書第27集』武雄市教育委員会
東中川忠美　1996 『内野山北窯跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（20）』佐賀県教育委員会
前山　博　1990 『伊万里焼流通史の研究』誠文堂印刷株式会社

写真１　1996年調査時の茂木港外遺跡海底状況

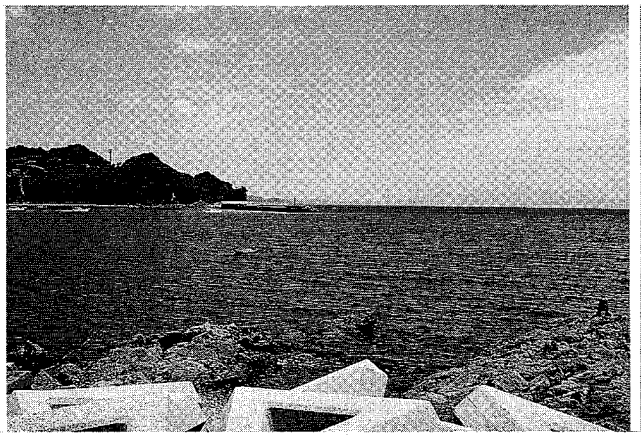

写真２　茂木港外遺跡遠景

写真３　1998年遺物確認状況（ブイ１付近）

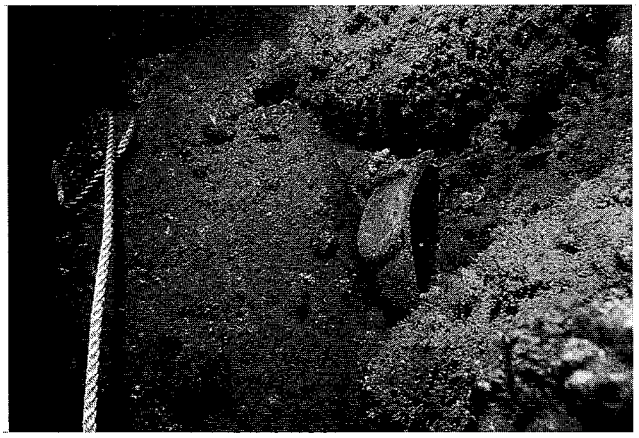

写真４　1998年遺物確認状況（ブイ１付近）

写真５　1998年遺物確認状況（ブイ１付近）

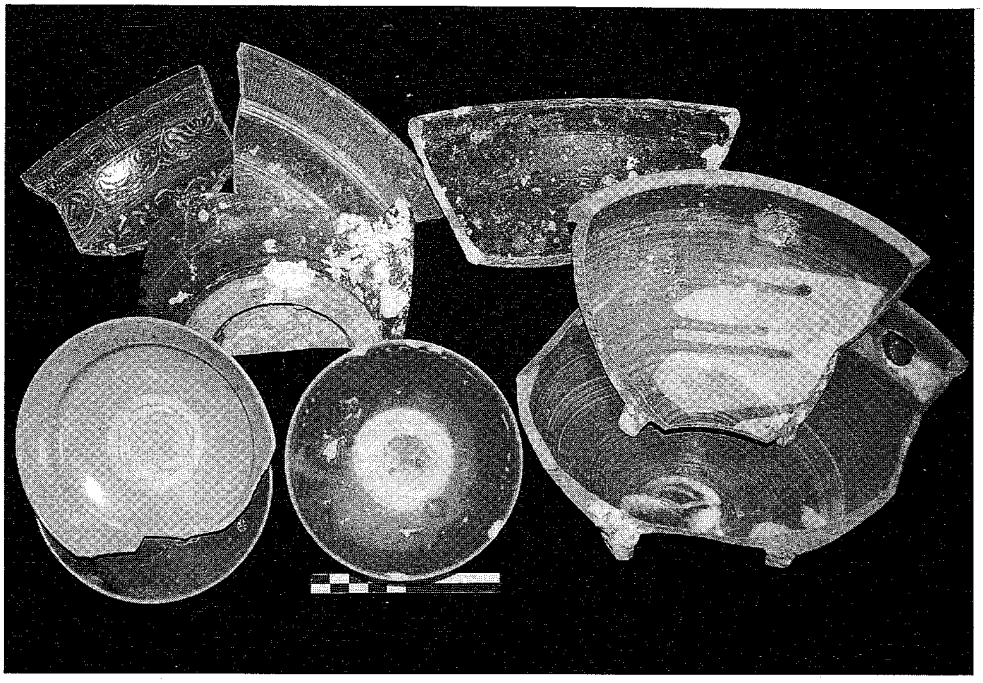

写真 6　1996 年茂木港外遺跡引揚げ遺物（長崎市教育委員会保管、写真 7 ～ 10 も同じ）

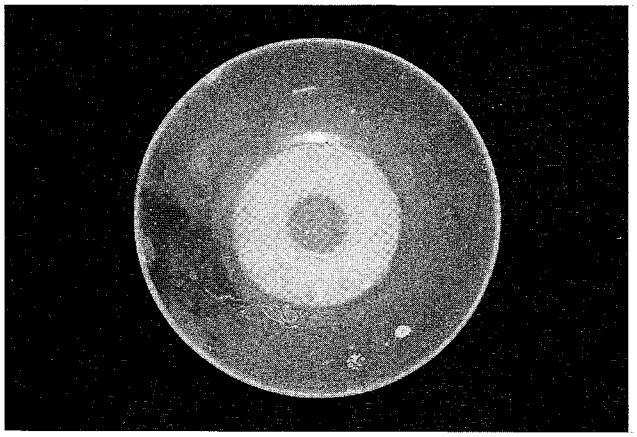

写真 7　唐津系銅緑釉皿（1996 年引揚げ）

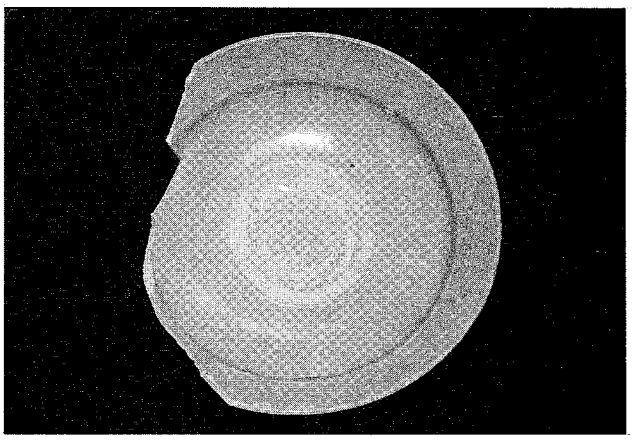

写真 8　唐津系灰釉皿（1996 年引揚げ）

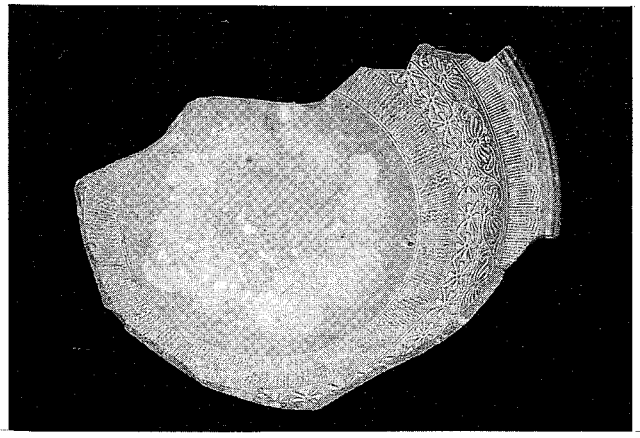

写真 9　唐津系三島手大鉢（1996 年引揚げ）

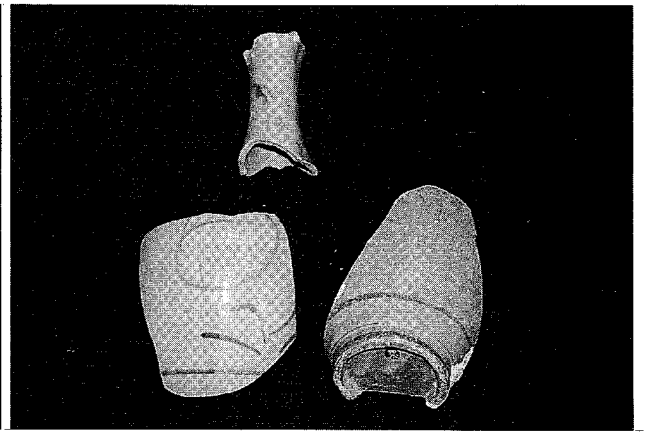

写真 10　染付瓶（1996 年引揚げ）